浜中町立茶内小学校「学校だより」

THE　茶内小　TIMES

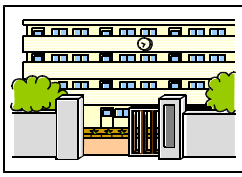
令和５年（2023年）１月23日発行　VOL 43

2050年頃の学校の状況を予想してみると

浜中町立茶内小学校長　冨　田　直　樹

2050年というと、今から27年後になります。第６学年の子どもたちは39歳、第１学年の子どもたちは33歳になっています。教員で考えれば、本校の若手教員である岡村教諭や津田教諭は50歳ぐらいになっています。その頃の学校はどうなっているでしょうか。

東洋大学大学院教授の根本祐二氏は、今後の児童数・生徒数と国が示す小中学校の適正規模（「公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律」第３条及び「学校教育法施行規則」第41条に基づく）をもとに、2050年頃には小中学校の数がどれぐらいになるかを推計し、「人口減少時代における地域拠点設定とインフラ整備の在り方に関する考察」としてまとめています。そこには、次のように記されています。



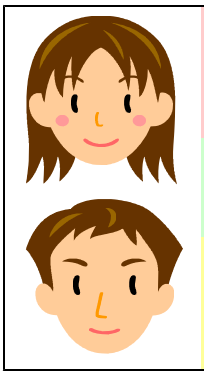
2050年頃には小学校数は現在の20,000校弱がおおよそ6,500校に、中学校数は現在の10,000校弱が約3,000校に縮小します。地方はさらに厳しく、島根県、和歌山県、高知県、岩手県では、小学校数は現在の１割程度に減少します。東京都、大阪府、愛知県でさえ半減します。

学校数が３分の１になってしまうとしたら、学校の役割や教員の働き方が今のままであるとは考えられません。そのときに必要な教員数はどれぐらいでしょうか。採用計画はどうなるでしょうか。職場の年齢のバランスはどうでしょうか。

当然、採用を減らすことになると思います。現在の大量退職に合わせた大量採用が終わった後はほとんど採用せず、退職による自然減少を待つことになるのではないでしょうか。

ここで、２つのことを考えてみます。最初に、かなり不均衡な年齢バランスの職員室が、数十年続くことが考えられます。若手教員は皆無、ベテラン教員ばかりの職員室はなかなか想像できません。次に、退職者による自然減少では、統廃合により生じる過剰な教職員はどうなるでしょうか。統廃合の速度を落とすことが考えられますが、その頃の国の財政を考えると、その速度を落とすことは考えられず、むしろ、速度が加速するのではないでしょうか。そうなったときの状況は、かなり厳しいことが想像できると思います。

このような厳しい状況の中でも、教師として生きていくためには、次の３つの資質・能力を身に付ける必要があると思います。ある意味、「不易」なことかもしれませんね。



１　もがきながら学び続ける

時代や社会の情勢により教師に求められるものは変わってくる。周囲の変化に伴って教師としての自分を変えていくこと。子どもの姿が自分の指導の結果と捉え、苦しくても学び続ける。

２　尊敬すべき先輩、後輩を探し、たくさん雑談をする

そのような人と雑談することで、もう一度、自分で考える勇気をもらえる。

３　柔軟な姿勢と信念をもつ

真似できるところは真似る。真似できないところは真似る必要はない。今の自分のままで、子どもたちの前で実践してみる。そして、失敗したら、素直に力量不足を認め、学び直す。